

なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」 なのか

橋本裕之

1. 共同研究がはじまるまで

これまで民俗学は、方法論ということばの意味をとりちがえてきたのではないだろうか。方法論とはけっして「私の方法」と同義ではない。民俗学という学問はよく知られているように、現地調査をほとんど唯一の、しかも有力な技法として用いながら、民俗を研究対象として記述することによって成立してきた。しかしながら、こうした行為を支える存立基盤については、まったくと言ってよいほど省みようとはしなかったのである。そのような手続きを欠いた知性に方法論がついにやどらないことなど、本来ならば誰の眼にも明らかであったはずなのだ——。

近年、民俗の変貌にもなあって、都市民俗学や比較民俗学といった新しい方法が開拓されているが、いずれもやはり調査や記述をめぐる諸問題と、それを規定している諸要因を批判的に検討するまでにはいたっていない。そのために、眼前でおこりつつある民俗を捉える試みとしては、必ずしも有効なものにはなっていないように思われる。たしかにこれらの方法は、民俗学にとって当面の延命策であったばかりではなく、おのれの版図を拡大することにもつながったけれども、じつのところおよそ方法論と呼ぶには値しないきわめて貧弱な成果でしかなかったのではないか。くりかえすが、こんなものは方法論でも何でもなかった。

国立歴史民俗博物館の共同研究「民俗誌の記述についての基礎的研究」は、民俗学を支えている存立基盤を検証することなくして民俗学方法論を詐称するこのような安易きわまりない姿勢⁽¹⁾に対する、いわば異議申し立てとして構想されたものである。共同研究がはじまった初期の段階では、こうした認識は必ずしも参加者の全員に共有されていたわけではなかったが、少なくとも本共同研究を構想した数名の間では確認されていたように思う。

それからしばらくたった現在ですら、参加者の立場は微妙に重なりながらもさまざまに異なっているが、いまなお共同研究の場で継続されている討議は、ゆるやかな共通の理解を生み出しつつある。これまで等閑視されてきた民俗学の存立基盤をいくつかの側面から明らかにすることを通して、民俗学が直面している理論的な諸問題に対する基礎的研究を試みたい。その結果はじめて、近代に成立した民俗学の知的可能性を追求するための視座が得られるのではない

なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか
だろうか。こうした認識は言うまでもなく、本共同研究の初志でもあったのである。⁽²⁾

2. ひとつの反省から

ところで上記のごとき認識は、じっさいには1988年度に終了した国立歴史民俗博物館の共同研究「日本民俗学方法論の研究」に参加した経験によって、少なからずかたちづくられている。研究代表者の福田アジオは3年間の成果をまとめた研究報告の冒頭において、善良な誤解を多く含んだ報告を行なっているので、つぎに紹介しておこう。

民俗学内部での検討ではすぐに重出立証法であるとか、周囲論であるとかが問題になり、近代社会における民俗学形成の意味を問うこともなく、資料操作法だけを議論していた。今回の共同研究では、民俗学およびそのような民俗学の資料操作法が生み出された社会状況や思想を含めて全体として民俗学方法論を検討することができた。⁽³⁾

しかし、一参加者として言わせてもらえば、それぞれの研究発表には重要な提言が含まれているものもなかったわけではないが、共同研究として福田が述べているような視座が準備されていたとは考えられない。共同研究と称して組織される場合は、まごうことなき「私の方法」の無限連鎖であったし、そのようなテキストを読み解いてゆくだけの仕掛けもまた施されていなかった。そのことだけはしっかりと記しておきたい。そして、ひとつにはこうした無残な光景に対する反省を通じて、本共同研究は生まれたのである。

もちろん、制度的側面にのみ注目するならば、共同研究「日本民俗学方法論の研究」と本共同研究の間には、いかなる関係も存在していない。国立歴史民俗博物館の民俗研究部がこぞって関わった共同研究「日本民俗学方法論の研究」と本共同研究とでは、成立の事情も大きく異なっているのだから、ここでわざわざ言及する必要はないのかもしれない。しかし、「日本民俗学理論の新たな構築を目指す」この共同研究に参加した研究者のうち何人かが、共通の疑問と反省をいだいて本共同研究に参加している。⁽⁴⁾これは否定できない事実である。⁽⁵⁾

福田はこの共同研究が初期にかかげた目標を、つぎのように整理している。

(1) 民俗学理論を広い立場から批判的に検討するとともに、新たな理論形成のための建設的な議論をし、民俗学の理論水準を飛躍的に高めようとする。

(2) 従来は民俗学研究者の余技として行われてきた理論研究を民俗学研究の新しい一つの分野として開発する。⁽⁶⁾

そしてこれらの目標は、福田の紋切型の表現によれば「相当程度達成できたと言ってよい」⁽⁷⁾ということになる。その当否は問わないにしても、理論研究をそれじたいで独立した分野として捉えるところなど、やはり強迫観念が生み出した「隣接諸科学」や「関連諸科学」というまぼろしに対抗して民俗学の版図を拡大しようとする欲望が見え隠れしており、あまり感心でき

たものではない。じっさい、それはドン・キホーテの滑稽にも似ている。

たしかに、理論研究が民俗学研究者の余技であったことは悲しいかな、事実には属することがらである。しかしそれにしても、その理論研究を「民俗学研究の新しい一つの分野として開発する」とは何ごとだろうか。理論はいつも、調査や記述の水準におけるおのれの方法に照らして主張されるべきものにほかならない。それはけっして新しい分野として開発されるようなものではなく、すべての民俗学的知性が等しくとりくまなければならない重い課題なのである。

ここではできるだけ好意的に解釈しておこう。どうやら福田は、かりにそのようなものが存在するとして理論民俗学の文脈で、民俗学理論を捉えているらしい。理論民俗学の可能性を模索する試みじたいは、けっしてまちがっていない。しかし、こうした認識を前提としてまとめあげられる自称方法論が、ひたすら自閉してゆくことぐらい、もはやあまりにも明らかではないだろうか。そこには、福田の総括にもかかわらず、「民俗学およびそのような民俗学の資料操作法が生み出された社会状況や思想を含めて全体として民俗学方法論を検討する」視座はやどらない。当たり前の話である。

3. なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか

ここからが本題になる。このような視野狭窄をまたぞろなぞることをよしとしない本共同研究が民俗誌の記述に注目したのは、共同研究「日本民俗学方法論の研究」のみならず、民俗学の全域にたちこめる上記の奇妙な認識論的前提に対する反省にうながされてのことであった。そこで本共同研究は、学問論と調査論の出会いところとして、民俗誌に注目している。じっさい、民俗学の存立基盤を批判的に検証しようとするさいに、民俗誌という形式はきわめて有効な手がかりを与えてくれるように思われた。

もう少しくだけて説明しておこう。民俗誌が民俗学において大きな比重をしめていることは言うまでもないが、にもかかわらず調査や記述という行為じたいは暗黙の了解事項とされてきた。それは民俗学という学問にとって、まことに不幸な事態であったと言わなければならない。そもそも調査や記述という行為なくしては民俗学そのものが成立しないのであるから、本来ならば「民俗学的認識の生産現場」⁽⁸⁾である調査、およびそこから得られた知識をまとめあげて民俗誌として立ちあがらせる記述を批判的に検証する試みによって、民俗学を支えている存立基盤が明らかになってくるはずであった。

こうした認識は方法論ということばを福田のようにひとつの分野として閉じこめてしまうのではなく、やがて民俗誌と呼ばれる形式につながってゆくべき調査や記述という行為との関連において、ひろくしかも具体的に捉え直そうとする態度を呼びおこす。すなわち、具体的きわまりない民俗誌を手がかりにすることによって、方法論をごく一部の研究者からとりもどして、

なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか

より広汎な議論の場へと解き放ってゆくことができるのではあるまいか。さきに民俗誌を学問論と調査論の出会いと記したのは、まさに民俗誌という形式が含意するこのようなひろがりに注目してのことであったのである。

しかも、民俗誌に対するこのような関心は、それら諸形式を生み出してきた時代的あるいは社会的状況に対するまなざしを要請することになる。言うまでもなく民俗誌は、それが記述された当時における民俗学の知的状況、さらには時代的あるいは社会的状況と最も具体的な水準で、しかも不可分に関わっている。したがって、民俗誌の記述を手がかりにして民俗学の存立基盤を明らかにしてゆこうとするさいには、その前提としてまず民俗学的思考の系譜をたどっておくが必要になってくるのである。本共同研究がおりにふれて、初期の民俗学にさまざまなかたちで関わってきた先駆者を訪問しているのは、こうした認識の具体的な上演にほかならない。

ところで、民俗学の先駆者からお話をうかがう企画は、例の共同研究「日本民俗学方法論の研究」においてもすでに試みられていた。しかしながら、先駆者の「民俗学の内容を理論の形成過程に焦点をあてて報告してもらい、その努力の中身を学ぶと共に、理論上の問題点を把握するための企画であった⁽⁹⁾」とする福田の総括にもかかわらず、残念ながらその目的はついに果たされないままに終わったように思う。

その理由は結局のところ、前述した奇妙な認識論的前提に帰着してゆく。すなわち、彼らの理論内容にばかり拘泥するあまりに、理論が生み出された文脈を読み解くための仕掛けは、やはり施されていなかったのではないだろうか。そのためか、彼らが聞かせてくれた初期の民俗学をめぐる証言は、テキストとして読みこむだけの豊かさにあふれていたのに、いまなお放り出されたままである⁽¹⁰⁾。

そこで本共同研究では、関心を必ずしも理論そのものに限定しないで、むしろ初期の民俗学にそなわっていた場の雰囲気、とでも言うべきものの所在をたしかめようとしている。そして、彼ら先駆者たちが民俗学に関心をいただいた動機や、その結果として調査や記述という行為にとりくむようになった理由などについて、敬意を表して特別講演とは称しているものの、じっさいには気楽な座談の形式をとりながら話してもらっている。

それは言うなれば、現地調査がどのように実行されて、民俗誌がどのように記述されたのか、その消息に対するまるとの関心であった。こうした関心はとりもなおさず、今日における民俗学のありようを批判的に検討し、さらに近代に成立した民俗学の知的可能性を足もとからたぐりよせるためにも、けっして欠くことのできない視座を導き出してくれるように思うのである。

ここで正直に告白しておかなければならない。「書きことば」だけではもはや汲みとることができなくなってしまったころの話題を「話しことば」で伝えていただき、初期の民俗学にみな

ぎっていた雰囲気にも耳を傾けようとする本共同研究の試みは、民俗学そのものに対する現地調査の意味あいも含まれていた。初期の民俗学にやどった知性とは、いったいどのような状況のなかで生まれてきたのだろうか。民俗誌の記述にそくしながらこの問いを掘りさげることは、そのまま民俗学という学問の存立基盤を明らかにする試みにつながってゆくにちがいない。

4. 共同研究のあらまし

本共同研究のあらましについても、いささかふれておこう。本共同研究は1989年度から3ヶ年計画で実施されており、現在も進行中である。上述した構想にしたがい、初年度には「民俗学的思考の系譜」と題したサブ・テーマを設定して、民俗誌の記述について原理的な議論を展開するための前提を共有することを心がけた。そののちに本共同研究がとりくむべき主要な課題として、2年度に「調査をめぐる諸問題」、3年度に「記述をめぐる諸問題」をそれぞれサブ・テーマに選び、民俗学の存立基盤を問いなおすための手がかりにしようとしている。

じっさいには、おもに研究会の方式を採用して、共同研究員がそれぞれ研究発表を行なうとともに、順次コメンテーターを担当する。さらにそれをめぐって討議を行なうことによって、議論の内容を深めようとしている。また、民俗学的思考の系譜を明らかにするための実証的な調査研究として、すでに述べたように民俗学の研究に関わってきた先駆者を訪問する試みを続けている。本共同研究の構想にかたちを与えてゆく試みのひとつとして、この企画のはたす役割はやはり大きいと言わなければならない。そのなかで、次節で紹介しているような思いがけない発見にも出くわすことができたのである。

本共同研究の概要と経過については、あらためて詳しく総括することにして、さしあたり参加者のみ簡単に紹介したい。当初、本共同研究に参加した研究者は以下の11名であった（所属は1991年3月現在）。

鵜飼正樹（社会学）

大月隆寛（東京外国語大学外国語学部／民俗学）

小川徹太郎（民俗学）

蔵持不三也（早稲田大学人間科学部／文化人類学）

佐藤健二（法政大学社会学部／社会学）

関一敏（筑波大学歴史・人類学系／宗教学）

福島真人（東京大学東洋文化研究所／文化人類学）

藤井隆至（新潟大学経済学部／経済学）

山折哲雄（国際日本研究文化センター／宗教学）

上野和男（国立歴史民俗博物館民俗研究部／社会人類学）



岩崎敏夫氏（1989年12月24日撮影）



箱山貴太郎氏（1990年2月4日撮影）

橋本裕之（国立歴史民俗博物館民俗研究部／演劇学）

また第2年度からは、新たに岩本由輝（東北学院大学経済学部・国立歴史民俗博物館民俗研究部客員／日本経済史）・小林忠雄（国立歴史民俗博物館民俗研究部／民俗学）の両氏が加入した。さらにゲスト・スピーカーやオブザーバーを多数まじえた研究会はいつも盛況で、白熱した討議が長時間におよぶのは毎度のことになっている。ともあれ、本共同研究がつねに開かれた場としてあることは、とくに強調しておきたい。たとえば、本書に収録した上野誠（日本文学）・小池淳一（筑波大学大学院歴史・人類学系博士課程・国立歴史民俗博物館大学院受託学生／民俗学）の両氏による挑発的な論考は、いずれも本共同研究における研究発表および討議のなかから生まれたすぐれた成果であった。なお、上野氏には本共同研究における研究協力者として、最初のゲスト・スピーカーをお引き受けいただいている。

それから、これはいまさら強調するまでもなからうが、長年にわたって民俗学の研究に関わってきた先駆者たちとの世代を超えた対話は、いつも心地よい知的興奮を感じさせてくれる。これまでもすでに岩崎敏夫・箱山貴太郎・竹内利美・平山敏治郎の諸先学からお話をうかがう機会に恵まれているが、そのうち本書には、初年度に行なわれた岩崎敏夫・箱山貴太郎の両氏による特別講演の記録を掲載した。なお、1989年12月24日に福島県相馬市で行なわれた岩崎氏の特別講演にさいしては和田文夫氏をはじめとする福島県民俗学会の方々に、1990年2月4日に長野県上田市で行なわれた箱山氏の特別講演にさいしては田口光一氏に、それぞれご高配をたまわっている。以上の諸氏に深く謝意を表したい。

5. 本書の刊行にあたって

ここまで、本共同研究の活動について少しばかり紹介してきた。本書は、そのうち初年度の

サブ・テーマに基づいてまとめられた中間報告である。共同研究の成果は、通常ならば3ヶ年の計画がすべて終了したのちに研究報告として刊行されるべきものかもしれない。しかしながら、本共同研究では参加者の強い意向を受けて、このようにきわめて異例の措置をとることになった。慣例にしたがわない野心的な試みであり、本共同研究の構想と密接につながっていることでもあるので、本書の刊行にいたるいきさつについて、簡単に説明しておきたい。

すでに述べたように、本共同研究が初年度のサブ・テーマとして設定した「民俗学的思考の系譜」は、民俗学的認識の生産現場である調査、およびそこから得られた知識をまとめあげて民俗誌として立ちあがらせる記述を批判的に検証するために、どうしても欠かすことのできない課題であった。したがって、初年度のサブ・テーマに基づいて編まれた本書の刊行は、やがて調査や記述をめぐる諸問題に正面からとりくむことになる最終的な研究報告にむけて、ぜひとも踏み出さなければならなかった第一歩なのである。すなわち、本書の刊行したい、本共同研究の構想をよく体现するものであったと見なせるのではないだろうか。

そればかりではない。本共同研究では幸いにも、初回からきわめて活発な議論がまきおこった。以来こうした作法は現在まで続いているが、それにつれて、本共同研究の速度を何らかのかたちで定着させたいという意見が数多く出されるようになった。そこで、具体的な方法について何回かにわたって入念に検討した結果、最終的な報告を待たずして、本共同研究の趣旨と深く関連する論考・記録・資料などを掲載した本書を中間報告として刊行することで合意に達したのである。

こうした気運が盛りあがった理由のひとつとして、本共同研究には比較的若い世代に属する研究者が多く含まれているという事情をあげておくべきかもしれない。けれども、共同研究の成果を世に問うのであるならば、それなりにまとまったものを刊行しなければならないのは当然の責務である。正直なところ、計画の半ばで刊行される本書が共同研究の成果にふさわしい体裁をなすものかどうか、いささか心配ではあったのだが、いざ原稿が集まってみると、そのような不安は吹っ飛んだ。いまでは、本共同研究の活気にあふれた雰囲気そのまま紙面に定着させておくことにも、少なからず意義が存するものと確信している。

なお、本書の構成にそくして、説明が必要であると思われる部分についてのみ、さらに補足しておく。前節でも少しふれたが、岩崎敏夫氏と箱山貴太郎氏の証言に関する記録は、ともに民俗学的思考の系譜を探る実証的な調査研究として企画した特別講演に基づいている。当初は記録というかたちで統一するつもりだったが、岩崎氏には当日に用いられた上演台本に加筆したものをわざわざ提供していただいた。箱山氏のばあいには、その魅力的な語り口をなるべく生かすよう心がけたつもりである。⁽¹¹⁾ おふたりの証言は、初期の民俗学における知性のありかたを生き生きと伝えてくれる。

また、巻末に付されている柳田国男の講演「海上生活の話」は、箱山氏との出会いのなかで

なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか

発見されたもので、きわめて貴重な資料であると思われる。「話しことば」と「書きことば」の関係性を再考するための手がかりとして、本共同研究にとっても益するところが大きいと判断したため、あわせて掲載している。詳しくは、いかにも本共同研究にふさわしい佐藤健二氏の入念な解題を参照されることをおすすめする。

最後になったが、一言だけつけくわえておきたい。それは、本書にこめられたもうひとつの意図について、である。共同研究という形式にはさまざまな可能性が考えられて然るべきであるが、本共同研究はたがいに異質な思考が交錯する場として、もしくはさまざまな軌跡を描き出す運動として、そのありようを性格づけられている。したがって、本共同研究がとりかかっている試みは、性急にひとつの正解を求めるべきものでも、いずれひとつの結論に収斂してゆくものでもないように思う。

——とすれば、本共同研究にとって最もぞましいのは、むしろ共同研究という場をそれぞれに読みこんでゆく、その軌跡じたいを定着させる試みなのかもしれない。あえて計画の半ばで中間報告を刊行することになった所以である。いずれにせよ、こうした試みを持続させるばかりではなく、さらに広汎な議論の場へと乗せてゆくために、本共同研究がとりくまなければならない課題はあまりにも多い。本書の刊行が、民俗学の知的可能性にむけて少しでも近づくための第一歩になれば幸いである。

註

- (1) 本共同研究の構想については、さしあたり橋本「新規共同研究の展望・民俗誌の記述についての基礎的研究」『歴博』第35号、1989年、14頁、を参照のこと。しかしそこでは、都市民俗学や比較民俗学を不用意に方法論と呼ぶ誤りを犯してしまった。ここで訂正しておきたい。
- (2) そのために本共同研究は、構想の段階では「日本民俗学 of 思想史的研究」(Intellectual History of Japanese Folklore Studies) と題されていたが、諸般の事情によって改称を余儀なくされた。結果的には、現行の名称によって問題の所在がさらに鮮明になったからよかったものの、思想史と言うと林羅山やら山崎闇斎やら柳田国男といった連想しかできない知的偏向にも困ったものである。学問という知の体系じたい、思想史的検証の対象になりうることは、何も民俗学にかぎったことではないのだが、どうやら歴史学だけは安泰であるといった発想は、いまだにしぶとく生き残っているらしい。じっさい、同じように近代に成立した人類学は、すでに民族誌の作者性についての議論などを手がかりとして、自己反省をおのれに課す時期にさしかかっている。もっとも、こうした徴候は、その学問が歴史的使命を終えつつあることを暗示しているようにも思われるのだが。それにしても、こうした試みが人類学そのものからではなく、隣接する近現代史の領域から起こっているのは興味深い。
- (3) 福田アジオ「共同研究の概要と経過」『国立歴史民俗博物館研究報告』第27冊、1990年、6頁。
- (4) 同書、2頁。
- (5) たとえば、大月隆寛「「まるごと」の可能性——赤松啓介と民俗学の現在——」『国立歴史民俗博物館研究報告』第27冊、を参照のこと。
- (6) 福田アジオ、前掲書、5頁。
- (7) 同書、5頁。
- (8) 小川徹太郎「フィールド再考——調査と経験の間——」『らく』第1号、1987年、10頁。
- (9) 福田アジオ、前掲書、5頁。
- (10) 共同研究「民俗学方法論の研究」では、橋本鉄男・赤松啓介・山口弥一郎の三氏が特別講義を行な

なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか

っているが、その成果はまったく具体化されていない。ただし山口氏のばあいは、その講演要旨を別のところで活字にしている。山口弥一郎「私の民俗学方法論」構想『福島の民俗』第17号，1989年，参照。

- (1) ちなみに、箱山氏からとどいた書信には「柳田先生のおっしゃるように話しことばは文章にはなりません……」とあった。ここにも、まさに民俗誌の記述をめぐる諸問題の一端がうかがわれる。本書に収録されている佐藤健二「解題および講演の復元」を参照のこと。

(本館民俗研究部)